ヘルスケアFM研究部会

医療周辺業務のタスクシフトにおけるFMの役割の考察

部会長 森 佐絵
もり さえ
清水建設株式会社
プロポーザル・ソリューション推進室
ビジネスソリューション部 主査
認定ファシリティマネジャー

医療周辺業務のタスクシフトの現状

医師の時間外労働の上限規制が始まった。厚生労働省では、医師の労働時間の検討を軸に、医療従事者全般の働き方改革や医療提供体制の見直しまでスコープを広げ、働き方改革を推進している[1)]。働き方改革の全体像の中で、労働時間の短縮に向けた具体的な取り組みとして、タスクシフト／タスクシェアの推進が1番目に挙げられている[2)]。

医師の業務のうち、麻酔管理や人工呼吸器の管理補助が特定看護師へ、また診断書作成補助などが医師事務作業補助者へ移行している。看護師の業務では、看護物品の準備や検体搬送、入院の説明などが看護補助者や病棟クラークに移行している（図表中の太矢印）。

このように医療コア業務から医療補助業務へのタスクシフトが進んでいるが、さらに医療従事者の負担を軽減するためには、医療周辺業務スタッフへのタスクシフトを進めることが課題である。こうした現状をふまえ、FMの役割として業務範囲を見直すことが重要になっている。

医療周辺業務の効率化・合理化についての考察

これからの医療周辺業務の効率化・合理化を行う際はICTの活用が必要だが、現在、院内のデジタル化は診療行為に直結する開発に投資と知見が集中しており、周辺業務への活用にはまだ展開の余地がある。またFMに関係する業務システムと医療情報システムとの連携も、個人情報取扱いなどの理由から他業種に比べると遅れている。先行して取り組んだ病院では、実績を積み重ねることで病院DXを早期に実現する足掛かりを作る、として、実装後も日々改善点やアイデアを協議している。

以下にいくつかの取り組みを例示する。

・AIカメラ検知によるスタッフの再配置

患者の転倒や混雑度を検知し、閾値を超えるとアラートを出す。アラートにより応援スタッフを配置するなどの判断が可能となる。検知対象の拡大により、さまざまな業務の再構築に利用できることが考えられる。

・院内搬送ロボットの開発と導入

夜間などに調剤室から救急や病棟まで薬剤を搬送し、薬剤師は時間外の患者に調剤室にいたまま遠隔で服薬指導を行っている。他の病院でも診療材料など物流への活用が始まっており、多くの病院への普及が期待できる。

・においセンサーによる清掃の合理化

においセンサーをトイレに設置し清掃担当にアラートを出す。確実な清掃によるサービス向上が実現し、将来はより合理的な業務のオペレーションツールとなる。

・施設インフラ情報のリアルタイム可視化

電気やガス・水などの医療継続に必要なインフラ情報を、災害対策本部でデジタル表示している。今まで防災センターから電話で連絡を受けた職員が本部長に報告していたがリアルタイムで確認できるようになった。また、平常時に利用することも考えられる。

効率化・合理化により時間や資源を生み出し、医療周辺業務スタッフへ業務を移行して医療者の働き方改革に寄与する環境づくりに貢献する。近い将来、展開が予想される価値ある取り組みを、当部会では今後も研究し共有していく予定である。◀

【参考文献・サイト】
1)：厚生労働省：医師の働き方改革の推進に関する検討会
第18回（令和5年10月12日）（令和6年2月1日閲覧）
https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_05488.html
2)：中央社会保険医療協議会：医師の働き方改革の全体像
（令和5年6月14日）（令和6年2月1日閲覧）
https://www.mhlw.go.jp/content/10800000/000581840.pdf

図表　医療周辺業務の効率化で全体のタスクシフトが進む可能性が高い